

エッセイ

## 学問の風景

小野塚 恒 男

はじめに

季節は毎年、確かな足どりでめぐってくる。今年の夏は、安倍内閣が戦争法案成立の目的で通常国会を延長するという暴挙に出たため、例年以上に暑苦しく、長い夏となった。県内では猛暑到来と重なるように、戦争法案反対の動きが一段と活発になった。7月15日には新潟市役所前噴水広場で集会がもたれ、抗議の座り込み行動があった。全国津々浦々で集会やデモ行進があり、暑熱でムンムンしていた。そんななか、安倍首相は8月14日に「戦後70年談話」を発表し、「事変、侵略、戦争。いかなる武力の威嚇や行使も、国際紛争を解決する手段としては、もう二度と用いてはならない

い。植民地支配から永遠に訣別し、すべての民族の自決の権利が尊重される世界にしなければならない」と述べた。

はて、これはなにを言いたかったのだろうか。

「侵略」と「植民地支配」の文言こそあるものの、主語がなく、意味がまったく通じない。反省にもなっていないし、謝罪にもなっていない。「侵略」と「植民地支配」の二語を無理やり押し込んだという感じである。朝鮮半島や中国東北部を植民地にした先の戦争を、「侵略戦争」とか「間違った戦争」とかは、口が裂けても言いたくないようだ。侵略戦争かどうかについては、相も変わらず、後世の歴史家の判断を待つという態度である。いまの歴史家や歴史学者の判断は信用で

きないというのだろうか。

## 学問の軽視

自民党総裁でもある安倍首相は歴史学を、高村正彦自民党副総裁は憲法学をないがしろにしている。中央大学法学部出身の高村副総裁は、戦争法案を「違憲」と断じた憲法学者に暴言を浴びせた。

「法の番人は最高裁判所であり、憲法学者ではない」「憲法学者はどうしても憲法9条2項の字面に拘泥する」、「学者は、最高裁判決までおかしいというヤカラだから、話を聞く必要がない」などなど。

これほど憲法学者を侮辱した発言があるだろうか。高村副総裁は自分でも憲法学を学んだはずなのに、憲法学者や憲法学に対する敬意など、どこにも見当たらない。高村副総裁の憲法学者に対する高飛車で傲慢な姿勢は、今年の日本人のノーベル賞受賞者の謙虚な姿勢とあまりにも対照的である。戦後になって日本国憲法が公布され、その憲法が学問の自由を保障して、憲法学が豊かに発展してきたのではないのか。

## 学問の自由

自由権は平等権と並ぶ基本的人権の重要な柱であり、憲法第13条で「国民は、すべての基本的人権の享有を妨げられない。この憲法が国民に保障する基本的人権は、侵すことのできない永久の権利として、現在および将来の国民に与えられる」と規定されている。

憲法第23条では「学問の自由は、これを保障する」と規定され、研究の自由や研究発表の自由、教授の自由（教育の自由）などが保障されている。学問の自由は、戦前の学問弾圧の反省から生まれた、大事な人権である。

## 学問の独占

8月28日付の「朝日新聞」によると、伊藤祐一郎鹿児島県知事が前日の総合教育会議で、女性の高校教育のあり方について、「高校でサイン、コサイン、タンジェントを教えて何になるのか」、「それよりも少し社会の事象とか植物の花や草の名前を教えた方がいいのかなあ」と述べたということである。男性に数学の独占を認めてしまうかのような発言だ。知事は28日の

定例記者会見で「口が滑った。女性を蔑視しようということではない」と発言を撤回する考えを示したが、「時代錯誤の男尊女卑的暴言」、「性別を理由に教育を

制限しようとする絶対あつてはならない発言」などと批判が集中した。伊藤知事は東京大学法学部出身で、前職は総務省の官僚である。知事自身はサイン、コサイン、タンジエントをしつかり学び、数学もよくできて高学歴を手に入れたのではないだろうか。官僚になれたのも、のちに知事になれたのも、学問のおかげではないのだろうか。男性である自分自身はさんざん学問の恩恵を受けながら、女性はサイン、コサイン、タンジエントを学ぶ必要はないというようなことをいつている。とんでもない暴論である。サイン、コサイン、タンジエントが男性にも女性にも数学の奥深さをどれほど伝えてきたか、数学の発展にどれだけ貢献してきたか、また、数学がどれほど科学の発達に寄与してきたか、考えが及ばないのだろうか。

### 学問の恩恵

数学は「自然科学の言語」といわれることもあるほど、重要な学問である。数学は医学・物理学などほ

ちろんのこと、社会科学系・人文科学系の学問にも必要不可欠なものだ。

わたしは、2003年の夏に胆石除去のため、腹腔鏡手術を受けた。一昔や二昔前のような開腹手術ではなく、腹部に四か所穴をあけて胆嚢を切除する短時間の手術である。手術を受けた後にベッドの上で思ったことは、あの激痛の原因を取り除いてくれた医者はなんと偉大なのだろう、ということだった。わたしは術後一週間で退院したが、短い人は、術後わずか三日ほどで退院するという。医学の進歩に隔世の感を抱き、医療技術の発達に驚いた。そして、点滴治療を受けた術後の数日間ほど、薬のありがたさを感じたことはなかった。ふと、母校に薬学部があつたことを思い出した。恥ずかしながら生まれて初めて薬学の大切さを知った。薬学・医学も、歴史学・憲法学も、文系の学問も理系の学問も、重要な点では変わりがない。

### 学問の目的

人はなぜ、勉強しなければならないのか。その問いに答えを与えてくれているのではないかと思ひ、現役時代に毎年度、最初の授業で生徒に紹介してきたのが

太宰治の『正義と微笑』（潮文庫）に出てくる教師のことばである。

「勉強というのは、いいものだ。代数や幾何の勉強が、学校を卒業してしまえば、もう何の役にも立たないものだと思っている人もあるようだ。大間違いだ。植物でも、動物でも、物理でも化学でも、時間のゆるすかぎり勉強して置かなければならぬ。日常の生活に直接役に立たないような勉強こそ、将来、君たちの人格を完成させるのだ。何も自分の知識を誇る必要はない。勉強して、それから、けろりと忘れてもいいんだ。覚えるということが大事なのではなくて、大事なのはカルチベートされるといふことなんだ。カルチユアといふのは、公式や単語をたくさん暗記している事ではなくて、心を広く持つという事なんだ。つまり、愛するといふ事を知る事だ。学生時代に不勉強だった人は、社会に出てからも、必ずむごいエゴイストだ。学問なんて、覚えると同時に忘れてしまってもいいものなんだ。けれども、全部忘れてしまっても、その勉強の訓練の底に一つかみの砂金が残っているものだ。これだ。これが貴いのだ。勉強しなければいかん。そうして、その学問を、生活に無理に直接に役立てようとあせつ

てはいかん。ゆつたりと、真にカルチベートされた人間になれ！」

すべての学問の目的は、「心を広く持つという事」、「愛するといふ事を知る事」にあると信じた。

安倍内閣の文教政策はその目的がかなうようなものになつてゐるだろうか。

### 学問の迷走

安倍内閣は暴走し、そのもとで学問は迷走している。安倍内閣の下で防衛省予算は増額をつづけ、2015年度は5兆円を超えた。昨年は、日本が長年堅持してきた「武器輸出三原則」を投げ捨て、「防衛装備移転三原則」をうちたてて「死の商人」となる道を開いた。今年度の予算には、大学等に防衛装備の研究開発をおこなわせるための競争的資金三億円も盛り込まれている。それによつて、東京工業大学や千葉工業大学など、国立・私立を問わず、防衛省と研究協力関係を結ぶ大学が増えた。第二次安倍内閣の発足以降、「安全保障戦略」下で「軍学共同」が急速に進んでいるのである。8月14日の「毎日新聞」紙上で、2008年にノーベル物理学賞を受賞した益川敏英京都大学名誉教授はこ

うした現状を憂えて、「科学者よ、戦争に利用されるな」と呼びかけている。同新聞には、1949年に設立された日本学術会議の「戦争を目的とする科学の研究には絶対従わない決意の表明」も紹介されているが、安倍内閣の耳目には入っていないのだろうか。

### 学問の理想

9月16日の参議院平和安全法制特別委員会の安全保障関連法案をめぐる地方公聴会で、広渡清吾専修大学教授は「安倍政権が今回この法案を強行していく過程で、反立憲主義、反民主主義などと言われるが、学者の皆さんが感じていることは反知性主義ということだ」と強く批判した。「ボツダム宣言をつまびらかに読んでいない」と言い放つ安倍首相と、憲法学や歴史学など学問全般を軽んじる内閣に、危うさを感じるのは当然である。その「知性」で思い出すのは、『赤ずきんちゃん気をつけて』（庄司薫、文藝春秋）のなかに出てくる文章である。

「知性というものは、すこく自由でしなやかで、どこでもどこまでものびやかに豊かに広がっていくもの

で、そしてとんだりねたりふざけたり突進したり立ちどまつたり、でも結局はなにか大きな大きなやさしさみたいたいなもの、そしてそのやさしさを支える、限らない強さみたいたいものを目指していくものじゃないかといったことを漠然と感じたり考えたりしていた」。

安倍政権には「すこく自由でしなやか」な感じはまったくない。安倍政権からは「大きな大きなやさしさみたいたいもの」もまったく感じない。伝わってくるのは、強権的で、「強きを助け、弱きを挫く」姿勢だけである。学問の理想とは大きくかけ離れている。

戦争法案は秋風の吹く9月19日に参議院で可決されて、戦争法となってしまったが、たたかいはまだまだ、これからである。安倍内閣の政治は殺風景だ。歴史学や憲法学をないがしろにし、歴史学者や憲法学者に敬意を払わない国会議員には、早急に退場願いたい。

（おのづか つねお・所員）